



■ 発信元
 SPARCS事務局
 ■ 発行責任者
 院長 吉田茂昭
 ■ 連絡先
 青森県立中央病院 経営企画室
 (電話)017-726-8402
Vol. 1
 2012年12月14日発行

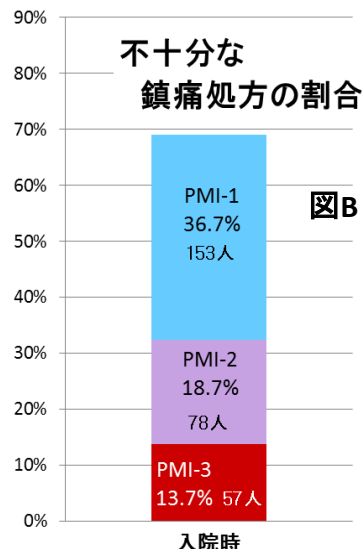
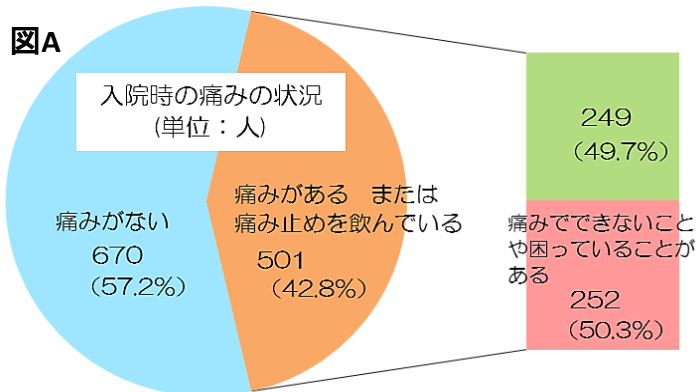
SPARCS開始から9ヵ月— いままでの調査で分かったこと。

2012年5月22日から10月26日までの間に入院した対象患者さんは、1,171人でした。このうち、入院時に『痛みがある、または痛み止めを飲んでいる方』は501人で、患者さんの**42.8%は入院時に痛み**がありました(図A参照)。

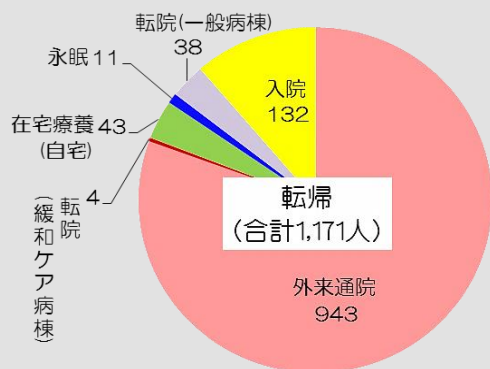
このうち**50.3%(入院時の4人に一人)が「痛みにより日常生活に支障がある」と**答えており、入院中の痛みの治療の重要性が明確になりました。

また、入院時に処方されていた鎮痛薬と痛みの強さの関係を、WHO方式がん疼痛治療法の鎮痛薬分類と比較すると(図B参照)、**強い痛みにもかかわらず鎮痛薬が処方されていない患者さんが13.7%**、強い痛みにもかかわらずNSAIDsやアセトアミノフェンなどの弱い痛みに対する鎮痛薬のみが処方されているなどの不適当な鎮痛薬の選択が18.7%に見られ、**合計32.4%の患者さんに選択されている鎮痛薬は痛みの強さと大きくかけ離れ**ている可能性があることが分かりました。今後、看護師による痛みの評価と、痛みが障害している患者の生活を医療チーム内で共有しながら、医師が痛みの治療をさらに強化していくことが、課題として明らかになりました。

図A



<参考資料> 患者情報の背景



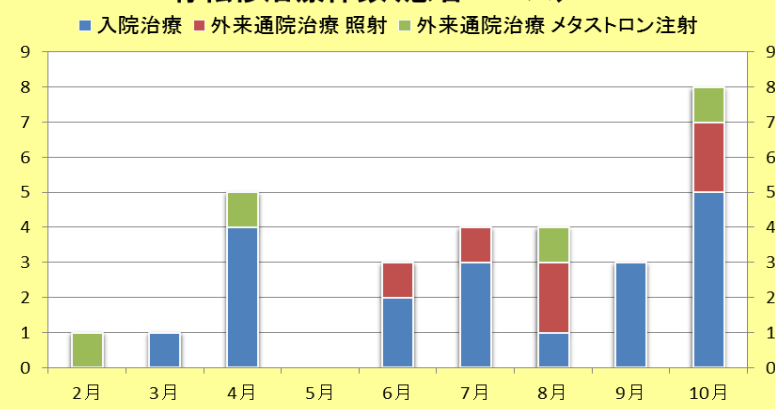
集計期間 … 2012.5.22~10.26
 全入院患者数 … 2,065人
 対象患者数 … 1,171人
 平均年齢 … 65.3才
 性別 … 男性627人(53.54%)
 女性544人(46.46%)

Topics 骨転移と放射線治療

骨転移は鎮痛薬が有効な場合もありますが、動作や加重に伴う痛みは十分に鎮痛できないことも少なくありません。一方、放射線照射による骨転移痛の改善は60~90%であるとされています。当院での骨転移痛に対する放射線治療の状況は

図Cの通りです。NRS 5以上の痛みがあり、痛みの原因が骨転移とされている患者さん17人のうち、放射線治療が調査期間中に実施されたのは9人でした。放射線治療を受けていない患者さんには化学療養中との回答もあり、癌腫による化学療法と放射線治療の選択の違いによる鎮痛状況についても、今後の検討課題と考えています。

骨転移治療件数(患者ベース)



図C

